

『小児薬証直訣』の版本に関する検討

郭 秀梅

順天堂大学医史学研究室

『小児薬証直訣』（1119）は宋・銭乙の撰述を弟子の閻孝忠が編輯した現存最古の中国小児科書で、中国小児科の祖と言われる。本書にはいくつかの系統の版本があるが、本報では『経籍訪古志』所載本と『永楽大典』から輯佚した武英殿聚珍（活字）本の問題を検討したい。

本書を著録した最初は宋の『直齋書録解題』で、「銭氏小児薬証真訣三卷、太医丞東平銭乙仲陽撰、宣教郎大梁閻季忠集」とある。後世この「真訣」は「直訣」、「閻季忠」は「閻孝忠」の訛字と多く認められているが、そのまま踏襲する版本もある。先行調査によると、本書の南宋版が国家図書館〔台北〕に唯一現存し、これに基づく清・陳世傑の仿宋刊本（1719）が中日両国にある。日本では『経籍訪古志』巻8に、「銭氏小児薬証直訣三卷、清・陳世傑の仿宋本。……卷端頁面に“照宋本重刊、起秀堂梓”を記す。……每半版八行、行十六字。書法は端雅、字は殆ど銭大、開卷せば悦目す。その宋本に原を取るは疑いなし」と著録された。さらに文末には、「近くに一小字別本を得、……甚だしく粗俗たり。但し、陳氏の是刻（仿宋本）に閻序を欠き、初頁に亦た或いは全て漏落有るを、小字本有りて始めて補完を得。此れ嘉ぶべし」とある。

そこで内閣文庫所蔵の医学館旧蔵本3種（303-270、同273、同275）を調査したところ、273本と275本は『訪古志』の仿宋本に一致していた。273本は別紙に閻孝忠序全文が半葉8行・行16字で補記され、275本には閻孝忠序の末尾5行しか残っていない。270本は半葉10行・行24字で閻序の全文があり、末尾に「重集上海陳世傑懷三」と「長洲門人」など9人が列記される。書末には多紀元堅自筆の漢文奥書があり、「これは甚だしい俗刻だが、唐船がもたらした陳懷三の原刊新刷本は閻孝忠序初頁を失い、あるいは全て欠落したらしい。今は本書で初めて補完することができ、殊に喜ばしい。これは弘前医員の渋江道純が得たものであり、私に譲ってくれたので書後に記す。壬寅歳九月二十七日 堅」という。この壬寅歳は1842年にあたる。さらに273本に補記された閻序全文は270本と同様だった。すると270本は『訪古志』が言及した小字本に間違いはない。

270本は既知の仿宋本や薛己注本・熊宗立注本の系統と相違し、後に刊行された周学海本とも別本たることが明らかにされている。ところで、「長洲門人」は陳世傑となにか関わりがあるのだろうか。実は、陳世傑は長洲出身の蔵書家・何焯（1661～1722）と交友があり、何氏から『金匱玉函経』を入手していた。ならば「長洲門人」とは何氏の門人であり、陳氏の書を重集したと推測できる。

周知のごとく、清の乾隆6年から47年（1741～1782）に『四庫全書』が編成、進上された。その『四庫提要』は纂修官の王嘉曾による乾隆45年の『銭氏小児薬証真訣』「校上」文を収録する。「校上」文によると、『永楽大典』から論証47条・医案23条・方114首を輯録し、三巻に類編、また閻孝忠序も得たとある。つまり当時、『銭氏小児薬証直訣』はすでに散逸したと認識されていたため、清朝は『永楽大典』から輯佚して武英殿聚珍本の『小児薬証真訣』を刊行したのだった。

その後、清代医家周学海本の自序は以下の事実を述べている。すなわち武英殿本の刊行からまもなく、陳世傑の仿宋刊本が書肆に出現した。両本を対校したところ、武英殿本は書名「真訣」と編集者「閻季忠」の誤記があるだけでなく、原本条文が不足し、銭氏本文には閻氏の加筆もある。結局、すでに仿宋本が出現していたのに、このような輯佚本を刊行したことは物議を醸しかねない。そう考え、あえて『四庫全書』には仿宋本も輯佚本も収録しなかったのだ。前述の270本と武英殿本の序文を比べてみると、数ヶ所の相違があり、いずれも270本の文字が正しいと判断できる。